

山田孝雄博士の『五十音圖の歴史』に関する一考察

A Study on Gojunozu-no-Rakishi(The History of Table of the Japanese Syllabary) by Dr. Yoshio Yamada

仲井文之

FUMIYUKI Nakai

『日本文法論』で名高い山田孝雄(よしお)博士の研究領域は広く著書も多い。その中の一冊『五十音圖の歴史』は一九三八年(昭和十三年)に出版された。この本は、大矢透博士が蒐集し考証を加えて年代順に並べた二十七枚の五十音図(『音図及手習詞歌考』附録)について、大矢とは別の視点で研究したものである。山田は、五十音図が(悉曇したん)の影響を受けた後、日本独自のものとして整ってきたこと、また、その過程で、六百年に渡り図の中にあつた誤り(ア行ワ行五段オとヲの逆転)がいつ頃起きたのか、また、それを正しい形に戻したのが本居宣長であつたことを明らかにした。その後、一九九三年(平成五年)に馬淵和夫は『五十音図の話』を著し、『五十音図』の起源が二つあつたことを指摘した。

五十音図にはこのように、日本語の歴史上の興味・関心を引く出来事がいくつも内在している。今回の研究では、山田孝雄『五十音圖の歴史』を軸に、学校教育で文字習得や文法学習のほかに興味・関心をもたせて学ばせることについて考えてみた。

キーワード：五十音図、悉曇、明覚、本居宣長、学校教育

一 はじめに ～五十音図と学校教育～

月刊『国語教育研究』二〇一五年一月号の小特集に、五十音図に関する小論二編が掲載されている。金子守「五十音図とそれによる学習指導―戦前の小学校教科書をもとに―」と岸野大「高等学校で五十音図をどう扱うか―文法指導のためだけでなく―」である。

金子は、五十音図成立の概要を示すとともに、明治の学校教育に「いろは図」に代わって五十音図が採用されるに至り、以来百五十年近く経った今もそれが続いていると記している。また岸野は、高等学校で五十音図が、歴史的仮名遣いの学習と動詞の活用の学習として扱われている状況を報告した上で、「文法指導のためだけに覚え込ませるのではなく、五十音図自体の謎を考え、楽しもう」と提案している。

二つの小論の要点は次の三点になると思われる。①五十音図成立の経緯（歴史）が明らかであること ②今は文字指導、文法指導として学校現場で利用されていること ③五十音図はそれ以外にも児童生徒の興味・関心を引く要素があり今後の活用が望まれること、である。

私はこの三点を受けて、特に③について考えてみたいと思った。

さて、①について金子は、馬淵和夫『五十音図の話』（一九九三年、大修館書店）に譲ると述べるに止めているが、③との関連で言えば、山田孝雄『五十音図の歴史』（一九三八年、寶文館）において明らかにされた本居宣長の功績（六百年続いたア行五段ヲ、ワ行五段オの位置の逆転を正しいものに戻したこと）や、宣長までにフとオの他のすべてを正しくした契沖のことも忘れることはできない。さらに、契沖、宣長以外にも、五十音図に挑んだ研究者がいたことや研究の内容を、児童生徒に指導する立場の教員はある程度は知っておくべきであると思った。

また、③について岸野は、高等学校での学習を想定しているが、私は初等教育でも触れておくべきではないかと思う。それは小学校の学習にも五十音図は出てきているが、学習に面白みや発展性を感じられないのは高校と同じと思えるからである。

一年生では文字習得の学習に用いられる。教科書の上巻には、ひらがなの五十音図が、下巻には、カタカナの五十音図が巻末に掲載されている。三年生の下巻ではローマ字が五十音図として巻末に掲載されている。ただしいずれの場合にも五十音図の名前は記載されない。

六年生では片仮名、平仮名のもとになった漢字と共に五十音図（名前なし）が掲載され、文字の歴史にも触れることができるようになっていく。しかし、現場教師自身がその詳細についてよくは知らないのが実情であろう。

以上、小学校では、五十音図が児童の文字習得のために利用され、覚えることが求められているがそれ以上ではないとも言えるだろう。今一歩指導を工夫して興味関心を持たせておくことが、その後の国語学習にも生かすことになると思うのである。

二 『五十音圖の歴史』出版の意図

1 本居宣長の功績を知らしめる

山田孝雄博士が、『五十音圖の歴史』を出版したのは一九三八年（昭和十三年）九月のことである。発行者は山田の著書『日本文法論』以来変わらず取り扱ってきた寶文館代表大場久治である。

さて、著書の発行当時、五十音図は一般にはどのような認識をされていたであろうか。序では、次のように言っている。

五十音圖といへば尋常小学校の一年生でもこれを知つてゐる。しかしながら、この五十音圖といふものが如何にして生じたか、若くは如何なる歴史のあるものかと問うたならば答へうる人はあまり多くは無いであらう。(傍線は筆者による。以下同じ)

山田の著書出版の理由の一つが、世間一般には五十音圖の理解が不足していると感じたことがあつたようだ。

江戸時代以来庶民にとつて馴染みある「いろは図」が、正式に「五十音圖」にとつて代わつたのは一八八六年(明治十九年)とされる。この年教科書が検定制となり、「五十音圖」が教科書に載つた。「読み書き」では、この表を基に教師が表音文字と発音を教え、文字学習を整理させた。その結果、国民の誰もが五十音圖を知るに至つたのである。しかし、山田博士にとつては不都合と思える事態もまた起きていた。序には、続けて、

現に私は近頃或る大學の國史の教授の發表した論文のなかに五十音圖は契沖がこしらへたもののやうに説いてゐるのを見て驚いたことがあつた。かやうな事は私共から見れば、決してあるべからざる事柄である。しかしながらそれが事實であつて見れば、私共はわが國語の為に泣いても泣き足らぬ悲しみを感ずるものである。實に現代の人は一般人といはず學者といはず國語を輕んじることが最も甚しい。私はこの五十音圖のことは國民的常識としてすべてが知つてゐなければならぬこと、思ふのである(中略)

山田孝雄は、元富山藩士山田方雄(まさお)の長男としてこの世に生を受けた。方雄は国学に明るく連歌の宗匠であつた。孝雄は一八八

三年(明治十六年)八歳のときから一八八九年(明治二十二年)十四歳まで、富山県土族佐伯有種について漢学を修めた⁴。これに続けて一八八九年(明治二十二年)から一八九三年(明治二十六年)十八歳まで、富山県土族尾山今民について国学(平田派)を学んでいる。そういう山田であればこそ「常識」が通用していないことへの「悲しみ」と感じられたのである。

この事態を打開することが目的となつたと思われる。では山田の言う「常識」とは何だったのか。序説では、

今日われわれがかやうな正しい五十音圖を傳へてゐるやうになつたのは本居宣長の學問研究のおかげだといふことを日常五十音圖をこどもに教へてゐる先生がたのなかにも御存じない方もあるかも知れないと思ふ。

五十音圖の過去には誤りもあつたが現在の五十音圖が正しいものであること、また、これは本居宣長の功績が大きかつたことが山田が常識としたいことであつたと思われる。

2 日本語研究の正統性と妥当性を示す

山田の『五十音圖の歴史』は、大矢透¹『音圖及手習詞歌考』に負うところ大きい。資料蒐集を基にした大矢の実証的な研究は高く評価されてその後の研究の在り方を示した。山田は、この本の中にある大

¹ 『音圖及手習詞歌考』(おんずおよびてならいことばかこう) 一九一八年(大正七年) 大日本圖書

矢によって蒐集され時代を追って並べられた二七枚の五十音図の一つ一つについて、これまでの自身の豊富な学究で得られた冷徹な目でさらに分析を加えている。並べ方はそれでよいか、どうしてそれが言えるのか、証拠とされるものの真偽はいかに等々。大矢の研究は、山田の研究にも大いに生かされたのであった。

その結果、山田は五十音図の段や行の形、特徴をはつきりさせることによって、大矢が最も古いとした図を否定した。また、最終的に正しい姿に戻したのが本居宣長であったことを明らかにしたのである。

このような成果を上げる一方で、山田の目的はあくまで国語への関心を高めることであり、教育への期待であったのではない。著書の序説には、

わが國の法格の認識は音聲の方向も語格の方面もこの五十音圖の知識を應用したことから出發したことは著しい事で、國語學史の一半はこの五十音圖の裏附が無くては理解できないものとなることは明白な事柄である。苟もこの五十音圖を輕視するが如きことでは國語學も初等教育もその行われるべき所以を知らないのである。

とある。五十音図が国語学の基礎基本であると言い、同時に、軽んじることがあってはならないと言う。これは、この頃日本語を西洋文法の立場から解釈する傾向があつたことに対しての山田の考えを示している。山田は、洋学に頼るまでもなく、これまで和歌、国学、漢字等を通して研究され続けており、その成果が五十音図だと言いたかつたのである。

山田にとつて五十音図は、日本古来の日本語研究の結晶というべきものであつた。日本語の活用も音韻であつてもわずか一枚の五十音

図で体系づけて表すことができる。それは国語学の誇りであり、山田自身の文法論もこれに立脚しているからなのである。

山田孝雄は、五十音図の歴史を明らかにすることを通して日本語研究の正統性と妥当性を示すことを意図したのである。

3 初等教育で教えるべきこととされたのは何か

『五十音図』が国定教科書に載つたのが一八八六年(明治十九年)であつた。『五十音圖の歴史』が一九三八年(昭和十三年)に出版されたのはその五十二年である。

当初の目論みは、子どもたちが文字を片仮名や平仮名で表記できるようにすること、次いで表を覚えさせ、やがては、日本語を自由に駆使できるようにすることにあつたと思われる。

しかし、ことはそう容易に進まないことが予想され、時間をかけて浸透することが図られた。五十音図はもともと江戸時代後期から明治初期すでに知られていたが、庶民には「いろは図」に馴染みがあり、文字表記では「いろは図」が使われ、発音理解には「五十音図」が用されたのである。

このようにしばらくは並記される状態が続いたが、明治末期にはほとんど「いろは図」が用いられなくなった。一九一八年(大正七年)の国定第三期の『ハナハト読本』では、『編纂の主意書』に、

いろは順ハ今ナホ世ニ行ハルルヲ以テ之ヲ掲ゲタレド彼ノ五十音圖ノ如ク學理的ニシテ将来語法學習ノ基礎トナルモノニアラザレバ、タダ之ヲ一應學バシムルニ止ムルモ可ナリ

とある。五十音図が学理的に認められて浸透している様子がうかがえると共に「いろは図」の指導が必要でなくなったと言っている。一九三三年（昭和八年）の国定四期『サクラ読本』からは「いろは図」の掲載はなくなった。山田は『五十音圖の歴史』の序説では初等教育で行うべきことを次のように指摘している。

初等教育に於いてこの五十音圖を縦横自在に暗記せしむることはわが國語の聲音組織の合理的なることと國語法則の根底的知識とを體認せしめることになるのである。それ故に初等教育に於いては今更事新しくこの五十音圖の機能を説明するには及ばない。ただこれを反復して習熟せしめておけばそれでよいのである。

やはり、五十音図は反復して覚えさせておけばよい。それ以上は学年が進んでからとされたわけである。その後もこの方針が変わった形跡はない。

以来百五十年が経とうとしている。現在の高校においても古文を読む際に語の活用を知る上で利用されているに過ぎない。覚えるだけに関心が高まらない状態がずっと続いているのである。

二 馬淵和夫『五十音図の話』に見る山田孝雄の評価

1 『五十音図の話』について

『五十音図の話』は馬淵和夫博士によって、一九九三年（平成五年）大修館書店より出版された。馬淵は『日本の韻学史の研究』『悉曇学書選集』の著書があり、学生のころから五十音図に関心をもっていた

という。韻学、悉曇学、五十音図の関係について馬淵は、次のように語っている。

（韻学は）日本に渡来した漢字音韻学と悉曇学（サンスクリットについての学問）の混淆した学問、としてよいと考えている。実は「韻学」という名称は江戸時代では漢字音韻学の意に使用されているのであるが、古来、右の二つの学問は混淆して研究、伝承されてきた（中略）「五十音図」はまさに、漢字音韻学と悉曇学の申し子として誕生した、といつてよいであろう。だからそこには千年に及ぶ歴史があるのである。

馬淵はこのような歴史の背景を語り、さらに読者が読み易いように本の叙述を、山田博士とは真逆の現代から時代を遡っていった。

2 宣長の功をめぐる見解の相違

『五十音図の話』の中で、山田博士の論について2つの点から触れられているがいずれも山田の見解とは違っていた。

相違の第一点目は、⁷本居宣長の功についてである。

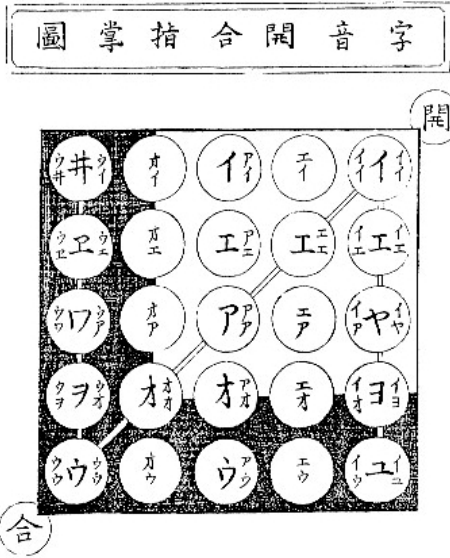
だから彼が、「五十音図」を正しく復元したとしてその功を高く評価されるのも、実は和語音について述べたのではなかった。それは『字音仮字用格』中において詳論され、国語学史上著名な「おを所属弁」も、実は字音仮名遣のためなのである。

この「彼」とは、宣長のことで、「功を高く評価した」のが山田孝雄

という構図になる。しかし、馬淵は、復元の目的は実は字音仮名遣のためであったと言いつける。その理由として、『字音仮字用格』の冒頭にある次の記述を挙げる。

近世難波ノ契沖僧始メテ是ヲ出ダシ和字正濫抄ヲ著セルヨリ古
 ヘノ仮字再ビ世ニ明ラカニナリヌルハ比類ナキ大功ナリ。ソノ後
 古ノ道イヨク開ケテ古言ノ仮字ヅカヒオキテハ遺漏ナキヲ〔中略〕
 字音の仮字ニ至テハ未ダ詳カニ考ヘ定メタルモノナクシテ喉音ニ
 行ノ仮字ハ殊ニ明ラカナラズ故ニ今先ヅ此三行ノ義ヲ弁ズルノ左
 ノ如シ(筆者による読み下し)

馬淵は山田とは違う見解をもつ。その理由は、右に述べたように、宣長が国語仮名遣の問題は、契沖によって十分だと思っていたこと、



残された問題が字音仮名遣と想っていたことによる。それでは「喉音三行」とは何か。それは、ア行、ヤ行、ワ行の三行であった。馬淵によれば、宣長は五十音図を音声を表す図とみていた。『漢字三音考』では上図のように、イエアオウの五音について、口の開きの開と合との次第を図示し、音声学的な観察を加えた。『字音仮字用格』の方ではこれを軽重の概念に置き換えて詳しく説明しているという。

3 中世の音図『文字反』をめぐる見解の相違

第二点目は中世の音図をめぐる相違である。

山田孝雄博士は、五十音図の変遷を段と行から見た。その上で中世の五十音図では、誤りが正せないままア行第五音ヲ、ワ行第五音オと表記するのがそのころの認識で、ア行第五音オ、ワ行第五音ヲの表記は後世のものとなされた。その基準により、大矢透博士によって最古の音図とされた『五韻次第』も、オとワの正しい中世の音図『文字反』も後世のものとして否定されたのであった。

ところが、馬淵は、日本韻学史を研究する中で、『五音生起』という本に出会ったという。その本ではアヤワ行が正しく書かれており、大矢博士も山田博士も目にはいかなかった資料だった。

ここに至って馬淵は、明覚流の正しい音図が別の系統である天台悉曇字に流れていたのではないかと推測する。そしてその流れの中に、これまで存在は後世のものとして否定された『五韻次第』も『文字反』も『五音生起』があるとするのである。

三 興味をそそられる国語学上の常識

1 漢字音を理解するための反音作法

日本語に文字がなかった時代、漢字を取り入れることから始まった。漢字をどう発音したらよいかその音を得るために、口の中で音を合成する方法がとられたという。この方法を考案したのが天台宗の学僧明覚（みょうかく）と言われる。明覚は、『反音作法』の中で、

此ノ反音ノ法ハ儒道ノ中既ニ絶タリ。今明覺年來之間或悉曇ヲ
 檢ル字書ヲ見テ書出セル所ナリ。案内ヲ知ラ不ラム之人之ヲ見ハ
 ニ至ラム矣。以テ一門ノ同法付ク外見ヲ經コト莫シ。

と言っている。この記述からは、最初にこの方法を用いたのが儒学でありそれが絶えてしまったこと、そして天台宗の明覚が経本を読む際に便利な方法として、真仮名で五十音図を表したということ、さらにこの方法が宗派の外に漏れて誹りを受けるのを避けようとしたということが読み取れる。これらの経緯は、非常にももしろく思われる。明覚の示した図は次のとおりである。

阿伊烏衣於

可枳久計古

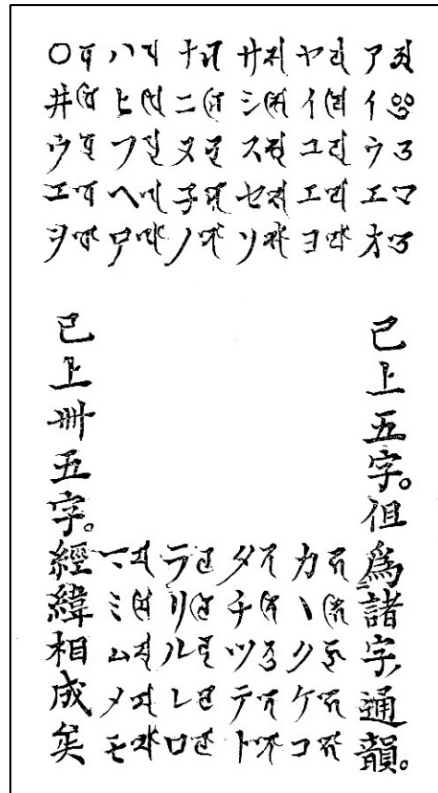
2 まがな。漢字をそのままの字形で国語の音に用いたもの。

多知津天都
 那爾奴禰乃
 羅利留禮嚕
 波比不倍保
 摩彌牟咩毛
 和為于惠遠

右の古写本ではサ行ヤ行が抜けているが、同じく明覚の『梵字形音義』では、次のように行の並びは今と違うが十行五十音である。

阿伊烏衣於 可枳久計古 左之須世楚
 多知津天都 那爾奴禰乃 波比不倍保
 和為于惠遠 夜以由江與 羅利留禮呂
 摩彌牟咩毛

次に、明覚の『悉曇要訣』では、左図のように、³梵字と片仮名とを同時に示している。



古代インドの文字が、經典の漢字音を知るために五十音図として工夫されたのだということは国語学者にとつては常識であるかも知れないがこれまで学校教育は知らされていない。

もし子どもたちの前にこれが示されたとしたらどうだろう。きっと不思議な文字として興味をそられることであろう。異国の言葉を発音しようとした日本人の姿や、当時の学僧の知識人としての姿に触れることは意味あることと思われる。

また、梵字をよく見ると、当初は不思議として見られなかった文字が段にも行にも共通性を発見でき、読めるようになるかもしれない。

³ ぼんじ 古代インドで使われた文字。梵語すなわちサンスクリットを記載するのに使われた。

話を本題に戻すと、この五十音図からは、段が今と同じであること、この後問題となったア行ワ行の五音はオヲと正しく表記されていたことを読み取ることができる。つまり、明覚にあつては最初から段の順序は今と同じであり、片仮名の表記も正しかったのである。

2 本居宣長による正しい音図の復活

さて、山田孝雄が指摘した本居宣長のア行ヲ、ワ行オの修正はどのような経緯で行われるに至ったのであろうか。『五十音圖の歴史』で山田は次のように述べている。

平安朝の末期から亂れはじめ、鎌倉室町を経て殆ど確定的に入ればはつた「オ」と「ヲ」の位置を當初の正しい音圖に復せしめたのは本居宣長の功績とせねばならぬ。

本居宣長は安永四年に著した字音假字用格といふ書に於いて「おを所屬辨」といふ一項を設けて従來の五十音圖の誤りを正した。今その語を要約して次にあげる。

として宣長の言葉を紹介しているが、次がそれである。

おハ輕クシテア行ニ屬シをハ重クシテワ行ニ屬ス。然シテ古來錯リテをヲア行ニ屬テ輕トシオヲ屬ベ重トス。諸説一同ニシテ數百年來イマダ其非ヲ曉レル人ナシ。故ニ古言ヲ解クニモ此ノおを

ニツキテハ此レ彼レ快カラザルコトアリ。又字音ノ假字ヲ辨ル
 ニハイヨイヨ舊本ノ如クニテハ諸字ノ假字一ツモ韻書ト合フ者無
 ク、諸説コゝに至テ皆窮セリ。是ニ因テ予年來此ノ假字ニ心ヲ盡
 シテ近キコロ始テ所屬ノ錯レルコトヲサトリ、右ノ如ク是ヲ改メ
 驗ルニ古言及ヒ字音ノ疑ハシキ者悉ク渙然トシテ氷釋セリ。

ここには、謎が解けた宣長の喜びが記されている。ここには、遙か昔の人も現代の私たちと同じように悩み苦しみ、疑問解決に向けて決然と立ち向かう姿、問題が解決された際は同じように喜ぶ人間の姿を知ることができる。そして私は、このような人間の営みを見童生徒が知ることが学ぶことの意義であると思うのである。

宣長が世の人々を納得させる証拠としたのは、後に「三類八證」と呼ばれるものでこれを山田は『五十音圖の歴史』の中で、詳しく記している。そして宣長の功績を次のように讃えている。

この「おを所屬辨」はわが國語學史上實に注目すべき一大研究である。この論は鎌倉時代以來の五十音圖のほとんど固定的になつてゐた誤を辨じてそれを研究立證して正しきにかへしたものであつて、この辨が出て、世人ははじめて正しい五十音圖を知るに至つたもので、かの契沖や眞淵などが説明に窮して隅達に通ふなど、云つてお茶を濁しておいた錯誤を正して鎌倉時代の頃から六百年間傳へ來つた誤を正しきにかへしたものである。これは實に五十音圖の上に於ける劃期的の大研究であつて、我々が今日正し

い五十音圖を用ゐてゐるのは實に本居宣長の賜である。

右の文中では契沖や眞淵と比較し最大限の誉め言葉を捧げている。ここには、お茶を濁すと評される人間の弱さもまた垣間見ることができ。見童生徒がそれを知ることともまた学びとなるであろう。

四 おわりに

以上、『五十音圖の歴史』を中心として山田孝雄博士が望んだことがどうしたら実現できるのか、すなわち、五十音圖に関する常識が世に知れ渡り、國語学への関心を高めるために、学校教育で見童生徒が五十音圖に関心をもてる学習内容について考えてきた。

結果として言えるのは、五十音圖を文字習得やその後の学習に必要として覚えさせるだけではなく、見童生徒の興味・関心呼び起こすであろう「人間的な営み」を同時に学ぶようにしたらよいということである。

具体的には、今回触れた「漢音を表記するための梵字から片仮名が生まれていったこと」や、「ア行からワ行までの行の順序や各行の段が定まった経緯」などがあるし、その他にも、「ヤ行二段と四段の空白があること」や、「ん」ががいつ加わることになったのか（今は入れられている）という不思議がある。

今回の研究は山田孝雄博士個人への関心と学校教育への思いが発端であった。残念ながら、博士が望んだ国民としての常識に遠く及ばな

いことを自覚したのであるが、眞淵、契沖、宣長、といった歴史上の人物の悩みや喜びに触れる思いがしたことが救いである。
 今後は、馬淵によって指摘された「宣長の真意」がどうであったのか、韻学に基づきながら考えてみたい。

註

- 1 『月刊国語教育』(二〇一五年一月号、日本国語教育学会編)二一八頁〜二二五頁
- 2 平成二〇年度版光村図書出版の国語教科書による。
- 3 山田孝雄『五十音圖の歴史』一九三八年 寶文館 一頁
- 4 大田栄太郎『山田孝雄想いで』一九八五年 富山市文化事業団 百二〇頁
- 5 馬淵和夫『五十音図の話』一九九三年 大修館書店 一八二頁
 後記
- 6 〃 一〇頁 はじめに
- 7 〃 七七頁
- 8 〃 八二頁
- 9 〃 百一四頁 五音生起の「五音」については、馬淵和夫『日本韻学史の研究』五百三十五頁で取り上げている。